

悪女の「役割」——少女マンガ「ライフ」にみる少女の「女ことば」—— 高橋すみれ

「仲むつまじいわねえ／正義のヒロインちゃんたち／あんたの正義なんかこの手で塗りつぶしてやるわ／真っ黒にね……!!」(Vol. 11, pp. 51-3) ¹

これは少女マンガ連載「ライフ」40話の最後の場面で、ヒロインとその親友に向かって、一人の少女、安西愛海あんざいまなみが発する言葉である。廊下の向かい側からやってきた彼女は、手を拭っていたハンカチをヒロインに投げつけようとする。この回の最後の頁では、その黒いハンカチを挟んで不敵な笑顔を浮かべる愛海の姿と、ヒロインの衝撃を受けたような表情が対置されている。ヒロインの「正義」を真っ黒に「塗りつぶす」と宣言するこの愛海言葉は、ここではヒロインを応援する読者の不安や期待を話の続きに向けて掻き立てるかのよう響く。

「ライフ」は、月刊少女マンガ誌『別冊フレンド』上で2002年から連載されているすえのぶけいこのマンガ作品である。2008年8月現在で連載70回を超えている同作は、学校でいじめられる立場になったヒロインが、次々と困難を克服していく過程を描いている。長期に及ぶこの連載において、ヒロインをいじめるクラスメイトの中でも、この愛海という少女の存在感は際立ってくる。彼女は次第に、みずから策略をめぐらし、周囲の登場人物たちを巻き込みながら、ヒロインを陥れるような行動を取っていくようになる。

物語の中でこのような愛海の描写が垣間見られるのが先の引用である。狡猾さや他人に向ける敵意・憎悪が強調されるような表情描写のもと、彼女は次第にこの物語の中で「正義のヒロイン」に対してみずから悪を名乗り出、挑発するようなふるまいを見せるようになる。注目したいのは、彼女の言動がこのような変化を帯びてくる過程で、先のせりふにみるように彼女が「わね」や「わ」など、従来女性が使うと見なされている文末詞を用いるようになることだ。

近年ではこれら「わね」や「わ」をはじめとする「女ことば」の文末表現の一部は、実際には現代の若年層の女性に使われる傾向にないと言われている。実際に現代の女性のインフォーマルな会話を分析した水本(2006)によると、30代以下の女性の会話では、「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言+ね」「体言+よ」「のよ」「のね」などの文末詞はほとんど使われていないという。しかし、これらの実用上衰退しつつある表現を愛海という少女はテキスト上で多用している。²

興味深いことに、「ライフ」の中ではこれらの文末詞が愛海と同世代の少女キャラクターの言葉にはほとんど出てくることなく、これらを継続的に用いるのは教師など年上の女性に限られている。また、愛海という登場人物は長期に渡る同連載のごく初期から登場しているが、

はじめから一貫してこのような表現を使い続けているわけではない。物語の中のある時期から、ある状況において彼女はこれらを使い分けるようになっていく。同連載が長期に及ぶものだという点からみると、「ライフ」におけるこのような愛海の言葉遣いの変化は、彼女の人物像の変容や、作中の他の少女たちと彼女の描写の差異化に寄与しているように考えられる。だが、そのために一時期から特殊な言葉遣いが採用されるようになったと考えるならば、なぜそれは女性が使うと考えられている「女ことば」であり、また同時に周囲の少女キャラクターにも使われていないような表現でなければならなかったのだろうか。このような問いのもと、本稿はこの連載少女マンガ「ライフ」における愛海という登場人物の言葉遣いの変化に注目する。

フィクションの中の「女ことば」を扱う先行研究では、「女ことば」というカテゴリーと社会や文化の中で構築される女性のイメージとの関係が注目されてきた。現実で実際に女性によって話されているか否かに関わらず、「女ことば」は女の話し方としてのみならず、女性の言葉遣いの規範としても認識されるものだ(中村, 1996/2001/2007)。そうした認識が強化されていくのは、フィクションの中の「女ことば」が、「やさしい、おとなしい、かわいい、あるいは、上品な女」などの望ましい「女らしさ」についての知識や規範を受容者に刷り込んでいくからとも考えられる(佐竹, 2003, p. 56)。その一方で、近年見直されつつあるのが、キャラクターがコンテキストに応じて「女ことば」を使い分けることの効果である(因, 2003/2005/2006; 山路, 2006)。「女ことば」の意味や機能を登場人物の発話意図のもとで、あるいはテキスト上の表現との関連のもとで理解しようとするこのような視点からは、フィクションにおける「女ことば」が必ずしも女性に望まれる柔らかさや上品さといったイメージに結びつくものではないという点が注目されている。しかし、フィクションの中の「女ことば」を扱うこれらの先行研究においては、言語使用とフィクションの物語構造との関わりは軽視される傾向にあった。³

本稿は愛海という登場人物によって用いられる「女ことば」の意味を、「ライフ」という物語テキストのもとで読み解くものである。しかし、本稿は「女ことば」が「女らしさ」の規範を表現するものか否か、また「女ことば」が体現する「女らしさ」とは何であるかを厳密に追究するものではない。むしろひとつの物語の中で、ある発話者が「女ことば」の使用によってどのような女として構築され、物語世界のなかにごう位置づけられるのかを検討しようとするものである。この物語の中で、愛海という少女は「女ことば」をある意味状況に応じて、また時に意図的に用いているように見える。しかし、その言語使用は同時に、愛海という登場人物が物語の中で描写される過程と背中合わせに展開している。もしも「女ことば」の使用が話者のパーソナリティ⁴の構築や、また何らかのイメージやステレオタイプの形成に関わるものならば、物語の中ではそれが多層的に進行していくことになる。

本稿ではこの物語テキストにおける言語コミュニケーションの多層性に注目し、愛海の「女ことば」使用がテキスト上で担う意味を明らかにしてみたい。⁵ また、本稿がこの「ライフ」という物語テキストを扱う目的は、同連載が少女マンガ誌において読者の人気を得、またとりわけ少女の学校生活を描いたものとして話題を呼んだということにも関わっている。同連載は2006年度に講談社漫画賞を受賞し、そのコミック単行本も2008年には発行「累計850万部」を超えたと公表されている。⁶ こうした人気を受けて「ライフ」は2007年夏にフジテレビで連続ドラマ化もされている。連載マンガ「ライフ」における一登場人物の言語使用を取り上げ、その意味を多層的に分析するという本稿の試みが最終的に目指すのは、この少女間の葛藤を描き反響を呼んだ連載テキストのフィクション性そのもの、およびそれに介在するさまざまな力関係に視野を開くことである。

1 物語の中の「女ことば」

連載少女マンガ「ライフ」の登場人物である愛海、および彼女によって発される「女ことば」の意味を解釈するために、本節で注目するのは物語の展開とその中で繰り上げられる人間関係との関連である。「ライフ」では学校におけるいじめを描いているが、次第に設定が大掛かりなものとなり、一時期に急な展開を見せ、攻撃描写が激化していく。それゆえ、物語の中での登場人物の位置づけや登場人物間の関係性が大きく変わることもある。この「ライフ」において愛海という少女は、はじめはヒロインの親しい友人として描かれる。しかし彼女はヒロインが自分の恋人を横取りしようとしていると誤解し、他の友人たちと一緒にになってヒロインを攻撃するようになる。さらに彼女は、ある時期から周囲の少女たちと連帯しての攻撃とは別の形で、ヒロインを苦しめようと個人的に企むようになる。このような連載の過程で愛海の人物描写は大きく変化を帯びてくる。この連載のある時期から愛海は「女ことば」を使い、また状況に即して意図的に使い分けているように見えるが、こうした愛海の言葉遣いの変化には、物語が経る展開や、物語中の錯綜する人間関係というコンテキストが関与している。⁷

中村(2007)のように「女ことば」が発話者のパーソナリティを構築するような資源だと考えるならば、愛海の用いる「女ことば」はこうした物語の展開や複雑化する人物間の関係を読者に提示する上でも機能していたとも考えられる。金水(2003, p. 205)は「特定の人物像」と結びつく形で想起されるような「特定の言葉遣い」を「役割語」と呼び、テキスト上で虚構のキャラクターが用いる言葉の特徴と、文化的ステレオタイプとの関連に議論を開いている。ある特徴をもつ言葉遣いによって何らかの人物像がイメージされるのは、その表現に特定の人物カテゴリーに対する私たちのステレオタイプの知識が強固に結びついており、この関連性のもとで特定の人物像が認識されるからである。山口(2007, p. 22)は「物語内の会話においてあ

る登場人物が別の登場人物に向けて発した発話を「微視的伝達」、その「読者（観客）に向けられた」面を「巨視的伝達」と呼び、虚構の物語における役割語の機能について次のように述べている。

役割語を話す人物は筆を割かずともどのようなキャラクターなのかステレオタイプの把握することができる。その分、作者も読者もストーリー展開に集中できる。つまり、通り一遍のステレオタイプの把握になろうとも、役割語は物語を効率よく提示するという巨視的伝達の要請に裏付けられているのだ。（山口, 2007, p. 23）

役割語はステレオタイプに基づいた人物像のコードに依拠することで、ストーリーを読者の前に「効率よく提示」するのに貢献する。そのため、会話表現としては不自然な部分を含んではいても、読者のイメージに沿ったわかりやすい形で物語を提示することができるのだ。このような面から見ると、本稿の冒頭で挙げたような愛海が唐突な描写（彼女がヒロインに突然ハンカチを投げつけた後、二人の顔が対置して描かれるなど）のもと、日常会話としては不自然な表現（本稿の冒頭で挙げた「正義のヒロインちゃん」、「正義」を「塗りつぶしてやる」、など）とともに「女ことば」を用いるようになる過程は、言語を用いる愛海自身の意図や心境にのみ注目するのでは十分に解釈できないと思われる。こうした物語における演出の変容を考慮に入れるならば、むしろ愛海の多用する「女ことば」は、読者に物語世界を効果的に示すために用いられるレトリックの一部として機能していたと考えられないだろうか。⁸

この観点のもと、以下では愛海の用いる「女ことば」の意味を、ストーリーの展開と密接に関連しあう二つの次元で捉えていこうと試みる。物語中の人間関係において愛海が「女ことば」を使い分ける文脈を検討する「微視的」な面からは、愛海の「女ことば」の使用が物語の中での彼女のふるまいや、彼女の置かれた状況とどのようにかかわっているのかを明らかにできる。また、テキストにおける登場人物の位置づけと「女ことば」との関係を見る「巨視的」な面からは、愛海の「女ことば」がどのようなイメージと結びついた上で物語世界が理解されるのかを検討することができる。しかしながら、これらの二つの側面は、相互に関わりあうものでもあることを忘れてはならない。以下第2節、第3節ではこの「女ことば」が用いられる場と状況の重なりに留意しながら、テキストで愛海が用いる「女ことば」の意味を「微視的」な側面、「巨視的」な側面の順に検討していく。

2 彼女の「戦略」——「微視的」にみる愛海の言葉——

愛海は物語のどのような段階において、どのような状況で「女ことば」を多用するようになるのか。それを見ていくための前提として、まずは連載初期における「ライフ」の物語展開を、物語の一登場人物としての愛海の主観に寄り添う形で追ってみよう。愛海が初めて登場するのは高校生になったヒロインの生活を描き出す第2話である。なかなかクラスになじめないヒロインの^{しいばあゆむ}椎葉歩^{さこかつみ}、人気者の愛海は明るく声をかけ、彼女と友達になろうとする。愛海には、ルックスもよく成績も良い佐古克己というボーイフレンドがいるが、キス以上になかなか進展しない彼との関係にやきもきする気持ちを、歩^{さこかつみ}だけに打ち明けるようになる。そんな中、突然彼女は克己から別れを切り出される。そのショックから精神的に不安定になり、学校を休むようになる。しかし後で歩に説得されたという克己が復縁を申し出てくる。このことで愛海は歩に感謝し心を許すが、次第に歩のふるまいに不信感を抱くようになる。そんな中、周囲の少女たちの話を聞き、歩が克己と肉体関係にあるらしいとわかる。自分が一度は心を許した歩が自分の恋人を横取りしようとしていたのを許せない愛海は、自分に同情する少女たちとともに、ヒロインを攻撃するようになる。しかし、歩は彼女たちがいくら攻撃してもなかなか屈しようとしな^{はとりみき}い。それだけでなく、自分たちが目の敵にしているクラスメイトの羽鳥未来とヒロインが友情を育み、またヒロインに対する自分たちの攻撃を非難する生徒も出てくるようになり、愛海は苛立ちを抑えきれない。そこで彼女はこの状況を変えるために、他校の男子学生と会うようになる。

これは主に学校内で愛海と周囲の少女たちが歩に対して攻撃を行っていくという、23話までの流れである。藤井(2007, pp. 62-4)は「女の子言葉」を使わず「男っぽい言葉」を使うようになった現代の少女像と対比する形で、愛海が「女性^はは弱くて守ってもらうもの」というジェンダーに乗っか^はっている^はと述べる。その上で特に「カツミの前だけではずごくかわいくふるまう」彼女に「王子様的な存在の人に愛されたい」という考え方がありと指摘されている(藤井, 2007, p. 64)。しかし、実際にここまで見てきたストーリー展開における愛海の言葉遣いのみ注目すると、愛海は他の友人らといるときや歩に対して話すときですら、克己といるときとさほど言葉遣い^はが変わることはない。

他の少女たちの話し言葉と比べてみると、ここまでの愛海の話し方の特徴には文末の言葉を伸ばすこと、および文末にくる文字の母音にあたる音が小さく書かれて付されていることなどが挙げられる(e.g., 「アユムはかわいーよォ? / マナねー / 最初話しかけたとき思ったもん!!」(Vol. 1, p. 121))。また、「女ことば」に分類される文末詞の中でも「の」「なの」、また訴えや甘えを表現する「もの」を撥音化した「もん」などが多用されている。気分が高揚しているときなどは「♡」「☆」「♪」などの記号を文末に伴う場合があり、克己との会話に特に多

用されるが、これは歩や他の友人たち、また他の男子キャラクターに向けられた発話にもみられる。もしもこのような愛海の言葉遣いが「かわいくふるまう」「弱くて守ってもらおう」ようなパーソナリティに関わっているとすれば、その言葉遣いやふるまひは克己以外の男性やクラスメイトたちの前など他の人物の前でも維持されていることになる。ここまでで彼女の言葉遣いに大きく変化が見られるのは、彼女自身が歩の前で怒りを爆発させたときの、「男ことば」と言われるような断定調の言葉や直接的な命令形が用いられる部分くらいである (e.g., 「黙れ」「一本だけでも飲ませてやる……」(Vol. 4, pp. 56-60))。

これらの「かわいくふるまう」「弱くて守ってもらおう」というパーソナリティに結びついた愛海の言葉遣いを、以降の議論では便宜上「女の子ことば」と呼ぼう。⁹ 愛海の「女の子ことば」と性格は、彼女の取り巻きである4人の少女たち(エミ、チカ、イワちゃん、ヒロ)の言動と部分的に対照をなす。彼女たちは同意を求める場合や推測する場合の「だろ」や「だよな」、要請をする際の命令形「しろ(よ)」、「だ」で終わるような断定的な表現、「～ない」という否定を表現する場合の「～ねー」など、「男ことば」と見なされるような表現を多用する。上述のストーリーの過程で、彼女たちは歩に一度克己を横取りされたかわいそうな愛海を庇護する立場にあり、彼女にかわって堂々と歩を非難し、歩に対して攻撃を行っていく (e.g., 「なに言ってんだよ!! イミわかんねー」「んなことするワケねーだろ!!」(Vol. 4, p. 52))。

先に述べたように、物語が進むにつれクラスの中では、これらの友人たちと愛海が歩に行う攻撃を批判する人物も出てくる。そしてちょうどその頃、愛海は他校の男子学生である狩野アキラに関わるようになる。アキラは不良グループのリーダー的存在であり、愛海に好意を持っている。アキラは愛海の依頼を受けて26-27話では歩と未来を拉致するが、その後歩と未来を監禁した廃墟が炎上し、彼は逮捕される。

興味深いことに、愛海が継続して「女ことば」を用いるようになるのは、このアキラというキャラクターが物語の主軸に介入してくる頃からである。愛海がアキラと関係を持ち、彼に歩を襲うように依頼するにいたる23-25話を境に、愛海の発話には時に「のよ」(e.g., 23話「なんでカラオケBOXでヤッチャわなかったのよ」(Vol. 6, p. 156))、「わよね」(e.g., 25話「わかってるわよね」(Vol. 7, p. 72))などの女性文末詞が見られる。また、これらのエピソードの後で再び歩と未来が学校に戻ってきた33話以降の展開では、愛海の発話には現代口語では衰退の傾向にある「女ことば」の文末詞「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「わよね」「体言+ね」「体言+よ」「のよ」「のね」¹⁰などが多用されるようになる。

この23話から33話以降の物語においては、愛海が二面性をもつ少女として描写されている。この時期に愛海のパーソナリティに生じる変化を具体的に検討するために、その変化の契機と考えられる23-24話のエピソードを取り上げてみよう。23話で愛海と肉体関係を持った

アキラは、24話のはじめに克己を襲っている。この24話では、克己が暴漢に襲われたという知らせが広がる学校で、愛海は涙を流して悲しむようすを見せる。このような愛海のように、周囲の少女たちが愛海に同情しながら無表情な自分を非難するようすに、歩は嫌気がさし、「ざまあみろ」と呟く。その行いは男子をも含むクラスメイトたちの反感を買い、歩が愛海をいじめているのだという噂すら呼ぶ。しかし悲しんでいたかに見えた愛海の携帯電話には、克己を襲った場での写真を添付した「かわいそうなお姫様へ 悲劇のヒロインにはなれたかい？」というアキラからのメールが届いている。

このエピソードにおいて、愛海はクラスメイトや教師などの前では被害を被ったかわいそうな立場を演じる一方で、彼らの見えないところで歩を攻撃することに成功している。アキラからのメールにある「悲劇のヒロイン」のごとく、クラスメイトや担任教師の目から見ると、愛海は傷ついた恋人を心配する状況にあり、同情されるべき存在である。周囲の人物が彼女に同情するのは、彼らにとって、愛海が純粋で従順に克己を愛しているように見えるからだ。そしてそのような愛海と歩を対置するがゆえに、彼らは歩を非難する。特に周囲の少女たちの中では、歩が克己に横恋慕しているという認識がある。そのため、克己の危機にも平気な顔でいる歩が薄情に見えるのだ。さらに、彼らにとって愛海の苦しみも知らないようにふるまう歩は非道ですらあり、愛海に対して悪意を持っているようにすら見える。この周囲の目によって愛海は再び「弱くて守られるべき」立場として支持を得、歩は非難されて当然と見なされる立場になる。一方、彼らクラスメイトたちの知らないところで愛海は克己以外の男と関係を結び、その男に克己を襲わせている。さらにその行いを通して周囲の人物に歩を非難させることに成功するばかりか、歩にさらなる攻撃を加えようと画策している。このように、愛海は皆の前で「弱くて守られるべき」立場に居続けることで、周囲の人物の支持を得ようとしている。そして同時に彼女は人前で「弱くて守られるべき」存在としてふるまうことによって、歩をより激しく攻撃するという自分の意図や策略を隠蔽しているのだ。このような自身のパーソナリティの操作に基づいた愛海の複雑で巧みな策は、アキラの登場によって可能になったと言える。¹¹

33話以降の展開に見られる愛海の「女ことば」の多用は、このアキラが物語の舞台から退いた後に、再び学校での「いじめ」の物語を描いていくための必然性と関わっているように見える。これまでの展開を踏まえ、愛海が歩を攻撃していくというストーリーを再び学校を舞台にして描いていくためには、愛海は先述したようなパーソナリティの使い分けを行っていかなければならない。皆の前で愛海は「かわいい」存在、「弱くて守られるべき」女の子であることによって周囲の支持を集めようとする。彼女がそのようなパーソナリティを維持し、歩に対して強者の立場にいるためには、自分が歩に攻撃されていると周囲に思われていなければならない。そのため、彼女が歩に対してとる攻撃的な態度は、それを示したところで彼女自身の立場が脅か

されることのないような状況でのみ表現される。愛海が同様に攻撃性を表現するときの言葉遣いで、特に彼女が激情に駆られたときに使う先述の「男ことば」は、この「意図的」か否かという点で彼女の「女ことば」の使用と異なると言える。

実際に愛海の「女ことば」の使い分けの例を、35話と36話の描写に見てみよう。以下(A-1～3)、(B-1～4)の例では、35話、36話で各々数ページに渡って連続して愛海のふるまいが描かれていく頁での彼女の言葉を抜き書きしたものである。

「役者」と題した35話から引いた以下の言葉は、アキラたちによる歩と未来の拉致に愛海が関与しているのではないかと、歩が愛海を問い詰めている場面のものである。先に触れた24話では、歩は周囲の状況に耐えかね、愛海に対して「ざまあみろ」という言葉を発していた。その後、愛海は歩がこれから克己よりも酷い目に遭うのだという謎めいた言葉を彼女に返している。33話で歩は愛海のこの不吉な言葉を思い出し、さらには自分を襲った男と愛海が知り合いだと聞き、愛海が自分を陥れようとしたのではないかと思うようになる。廊下にいる愛海を歩は呼び止め、自分たちの拉致に対する彼女の関与を問う。

(A-1) 「言いがかりはやめてくれる？／迷惑だわ」(Vol. 9, pp.130-1)

(A-2) 「……………／ひどいよ……………／あれはアユムにざまあみろなんて言われて……………／くやしくて言っただけなのに……………／たったそれだけのことでマナが犯人だって言うの……………？」(Vol. 9, p. 134)

(A-3) 「マナの予言は必ず当たるのよ／これからもずっとね」(Vol. 9, pp. 136-7)

歩に対して愛海が(A-1)のように答えるとき、頁上では歩と愛海の二人のみが描かれている。続く2頁の間では、かつてほめかしていたように愛海が自分たちを陥れようとしたのではないかと歩が問い詰め、二人が揉み合っている。そのうちに廊下に他の学生たちが数人出てくるようすが描かれる。すると突然愛海は(A-2)のように言葉遣いを変え、泣き出し始める。その次には廊下に出てきた学生たちが、災難を「人のせい」にしている歩を非難し、愛海を「かわいそー」だというようすが描かれる。しかしその後、涙を拭って立ち去ろうとするかに見えた愛海は笑みを浮かべ、すれ違いざまに(A-3)のように、今回の事件と自分の関与ばかりでなく、今後も歩を陥れることをほめかすような謎めいた言葉を彼女に告げる。

(A-2)を挟んだ(A-1)と(A-3)において、愛海は女性文末詞「わ」、「のよ」を用いている。(A-1)と(A-2)のいずれにおいても、愛海は事件についての自分の関与を否定する。しかし(A-1)では高圧的な態度を取っているのに比べ、廊下に他の生徒たちが出てきた(A-2)では、愛海が初期から用いている「の」という文末詞や、各々のフキダシに多く含まれた間(「……」)

などが泣き出す彼女の言葉に幼さや非力さを漂わせている。その言葉に反応するかのように周囲の学生たちが「かわいそー」な愛海を擁護し、一方の歩を非難しだすと、(A-3)で愛海は今後も歩に対して危害を加えることを宣言するかのような、挑発的な態度を示す。こうして愛海は自分が憎む歩に対しては強者としてのふるまいを見せつけ、他の人の前では弱者を装い、彼らの同情を買って歩への非難を促している。

さらに、「陰謀」と題された36話では、担任の教師と父親の前で、愛海が器用に言葉を切り替えるようすが見られる。前の二段で示した35話の展開の後半では、愛海は歩に攻撃を受けたと装い、保健室に運びこまれる。保健室にようすを見に来た愛海の取り巻きの一人、ヒロ(廣瀬)は、愛海の策略を知ってしまったゆえに、彼女から脅される。その際愛海はヒロを威嚇するように保健室を荒らしている。その後を描く36話では、愛海と歩の担任教師である戸田が、愛海が保健室から歪んだ笑みを浮かべて出てくるのを目撃し、さらに保健室の有様を見て驚愕するようすがある。以下に抜き出した(B-1～3)は、その後の一連の行いの中で愛海が発するものである。

(B-1)「もしかして アレ? /アレ見たんですか先生っ!! /もー超ーびっくりしましたよ /…だれかいるのかなーと思って… /カーテン開けたらあんな状態で…… /ひどいイタズラする人がいるんですねー」(Vol. 10, pp. 24-5)

(B-2)「マナを疑うことなんて二度とできなくなるわよ (フキダシ外の「ハン」という手書きの文字とともに)」(Vol. 10, p. 29)

(B-3)「……パパ…… /ごめんなさい…… /もう学校行きたくない…… /マナいじめられてるの……」(Vol. 10, pp. 37-9)

偶然愛海と会った戸田は、保健室の惨状について問いかけつつも、言い出し辛そうなようすを見せる。愛海は丸く目を見開いて、無邪気なようすで(B-1)と言う。愛海が元気に帰っていくようすを見て安心しつつも、戸田は彼女の歪んだ笑みを思い出し「…気のせいなのよね…… /あれは……」「本当に椎葉さんに殴られたのよね……?」(Vol. 10, pp. 27-8)と一人つぶやく。愛海の耳と、振り返って戸田の後姿を見る愛海の横顔が描かれた後、次の頁では愛海の怒りをたたえた表情と、歪んだ口元の描写とともに(B-2)がある。その後公園の砂場に直進し、頭から砂を被り、制服を汚して帰ってきた愛海は、心配げな父の前で(B-3)のように言いながら泣き崩れる。娘を抱きしめ、「…かわいいマナちゃんをいじめるなんて…… /このワシが絶対に許さんからな…… !!」(Vol. 10, pp. 41-2)と叫ぶ愛海の父の血走った目と、父の胸元でほくそ笑む愛海の表情が大きく描かれたところで、36話は終わる。

(B-2) では「わよ」が用いられているが、これは会話の相手がない、愛海の独り言である。(B-1) では、だれかほかの「ひどいイタズラする人」によって荒らされた保健室を目撃し、「超びっくりし」という彼女の無邪気なようすを、彼女の口語混じりの敬語が強調している。しかし、戸田の言葉から、彼女が歩に攻撃される立場にあるという認識が揺らぎつつあることを察するや、(B-2) のように「わよ」という「女ことば」でつぶやく。ここで愛海が企むのは、自分が攻撃される立場であるという周囲の認識が揺るがぬようになる策である。その上で、(B-3) のように彼女は父に「マナいじめられてるの」と頼りなく訴える。彼女はここで、自分を守ろうとする父が行動を起こすことを見込んでいる。興味深いことに、先に示した (B-3) を受ける愛海の父のせりふは、「ワシ」を自称詞として用いるなど、金水 (2003) が「役割語」のなかでも「博士語」「老人語」と呼ぶところの言葉遣いをしている。愛海の父は教育委員会に発言権を持つ社長であり、このような言葉遣いに伴うイメージのように、威厳や権威をもつ人物として描かれる。娘を守る父の威厳のもとでふるまうかのように、彼はこの後学校に対して娘がいじめられていると訴え、歩と未来に処分を下させようとする。

このようにして 34 話以降、愛海はヒロインを追い詰めていく上で、自分が弱い立場にあると周囲の人物に信じ込ませることで状況をうまく切り抜ける。この後彼女はさらに前述の友人ヒロを脅し、これまで歩に対して行われてきたいじめの主犯格として名乗り出るよう命じる。また、自分の行いに干渉してこようとする副担任の教師である平岡を、教育委員会に対して発言権を持つ父に頼んで異動に追い込む。このようなストーリーの中で彼女が自分の攻撃性を悠々と表現しうるとき、たとえば (A-1) (A-3) のように自分が敵意を向ける相手を挑発するとき、また (B-2) のように人に聞かれていないとき、そしてアキラのようなその時点で自分が共謀しうる、あるいは支配下に置きうる相手に指図するとき、愛海は「女ことば」を用いていく。

愛海は周囲の人々の前では「女の子ことば」のもと、イノセントでかわいく、庇護されて当然の存在として自分を演出している。このような場面とは別に攻撃的で利己的、また狡猾な態度を彼女が意図的に表現するとき、「女ことば」が用いられる。この「女の子ことば」と「女ことば」を使い分け、彼女は「悲劇のヒロイン」として周囲に同情されることで、歩に対する自分の攻撃性を隠蔽しながら、あるいは駆使しながら、巧妙に歩を攻撃していく。彼女の言葉の使い分けにあるこのような意図は、場に応じた言語使用のストラテジーにとどまるものではない。この物語の中で彼女は、ヒロインを虐げ、自分が彼女より優位に立つための文字通りの「戦略」を意識しているときに「女ことば」を使い分けられているように見える。

しかし、このような愛海の戦略は次第に綻びを見せ、彼女は周囲の信用を失っていく。愛海がヒロを自殺に追い込んだという噂が広まり、59 話で担任の戸田は愛海が「イジメの主犯格」

であると学校で白状する。するとかつての愛海の取り巻きも含めクラスメイトたちもいっせいに愛海を非難し、無視するようになる。このような展開の中で、ここまで見てきたような「女ことば」は愛海のせりふから次第に姿を消していく。ついに校内で彼女が大勢の生徒に非難を浴びせられるという、「地獄」と題された64話の一場面、追い詰められた愛海が叫ぶのは「…おまえらに／なにがわかる……」「だれが 土下座なんかするか ポケェ!!」(Vol. 17, pp. 23-5)という「男ことば」である。

この過程で、彼女はもはやかよわくふるまったところで周囲の庇護を受けられない、寄り添ない状況に追い込まれる。クラスメイトたちが愛海への不信感を強めていく57話に、次のような場面がある。愛海が教室に向かって廊下を歩いていくと、教室から「ムカつくよね マナちゃん」(Vol. 15, p. 68)という声が聞こえる。教室の中ではかつて愛海を取り巻いていた友人を含む8人の少女たちが円をなし、各々交代で愛海の真似をしては大声で笑っている。

「ねえねえ／パパア～～～ン／マナね～～え？／いじめられてるのお——」[…]「やめてよ／…ひどい…／…マナの／マナのモノマネするなんてっ……／ゼツタイパパに言いつけてやるんだからあ～～～～っ」[…]「カツミくんだってっ……／カツミくんだってマナのこと守ってくれるんだからあ～～～～」[…]「マナは悪くないもん／戸田先生がやったんだもんっ／マナはいつだって悪くないもお～～～～～～～ん!!」(Vol. 15, pp. 69-72)

愛海の普段用いる「女の子ことば」の特徴を強調するように、彼女たちは愛海の本真をしている。いまや愛海を問題視するこれらの少女たちのふるまいがカリカチュアライズするのは「パパ」や「カツミくん」といった男たちに「守って」もらおうとし、常に自分が「悪くない」立場でいようとする愛海の本真である。このように誰かに庇護されようとする彼女のふるまいには自分の責任を否定する狡猾さや「言いつけてやる」という間接的な攻撃性が見出されてもいる。少女たちが愛海に「ムカつく」という非難を向けるのは、彼女たちが「女の子ことば」を用いる愛海のパースナリティに、こうした否定的な側面を見出そうとするからだ。もはやかわいらしさ、かよわさといったパースナリティが周囲に歓迎されず、歩に対する彼女の優位が保証される土台にもならず、人の嘲りや非難の対象にすぎなくなる。この展開において愛海の本真が破綻していくとともに、彼女の「女ことば」はテキストから姿を消していく。

3 悪女の「役割」——「巨視的」にみる愛海の言葉——

読者の視点からストーリーをたどると、愛海がヒロインに対して怒りを向け、ヒロインへの攻撃に固執していくようすは不条理な、あるいはいきすぎたものとして解釈されるだろう。物語の初期から、愛海や彼女に同情する少女たちがヒロインに向ける怒りは、歩が愛海との友情を裏切り、彼女から恋人の克己を奪おうとしていたはずだという共通認識を土台としている。しかし、テキスト上ではヒロインのふるまいが彼女たちに誤解されていくようすもまた、読者の前に提示されている。テキストでは失恋して元気のない愛海の力になろうと、復縁を説得するためにヒロインが克己に近づくこと、そして彼に暴行され、以後彼が愛海と復縁した後も脅迫されるようになることが物語られる。この物語テキストを通して、克己とヒロインの間に本当に起こっていることを知らないがために、愛海や周囲の少女たちが彼女を攻撃するようになるのだと読者は理解するであろう。¹²

先の節で、愛海が克己をもアキラに攻撃させ、しだいに複雑な形で策略を展開してくることについて述べた。その過程において、この愛海の策略の根底にあるのは主にヒロインへの怒りであり、こうした怒りの原因である「誤解」は解けていない。興味深いことに、愛海が策略を繰り返していきストーリーが連続する中で、作品の中では次第にこの「誤解」について言及されなくなってくる。マンガ誌連載では第3話から「前回のあらすじ」欄が本編の最初の頁に設けられ、愛海についてはこれまでその内容が6回書き換えられている。「高校に入ってからできた歩の友達」(3話以降)の愛海が歩を「完全に誤解」していると書かれるのは13話であるが、この点についての記述は次第に「歩がカツミとつきあっていると思い込み」(22話以降)、「歩とカツミの仲を疑い」(49話以降)、とあいまいになってくる。51話以降ではその点について言及もされなくなり、「歩が憎しみと怒りの標的。超自己中な性格」(49話以降)という記述に「友人をも恐怖で支配」という言葉が加えられ、彼女が歩に向ける感情とともに、自己中心的で恐ろしいという彼女の強烈なパーソナリティが強調されていくようになる。¹³

前節では愛海が自分を弱くて庇護されるべき存在として見せていくため、「女の子ことば」と「女ことば」を切り替えていく過程を見てきた。一方で彼女はみずから歩を攻撃せず、アキラに拉致を依頼したり、また大人たちや他の生徒たちに歩が責められる状況を作ったりすることで、歩を苦しめていく。こうして間接的にヒロインを攻撃していく彼女が「女ことば」のもとで悠々と策略を述べる場面では、愛海はもはや弱い存在であるどころか、支配者であるかのような態度を見せる。例えば41話で愛海は自分を守ってくれると言う克己に対して信頼を寄せるかのようにふるまった後、「……ほんとはつまらない男／なんでマナあんな男のこと本気で好きだったのかしら／…まあ……／マナの思い通りになる駒は必要だしね……」(Vol. 11, pp. 70-1)と一人でつぶやいている。「女ことば」を使う愛海はまるで自分が力を握る強い

存在であるかのように話し、また周囲の人物を矮小化するかのように表現する。本稿の冒頭に挙げた「正義のヒロインちゃん」に対するせりふは、愛海が強者のようにふるまうこの種の表現の一つであるが、相手を小娘のように扱う意味合いが込められている。

こうした愛海のイメージには、斎藤(2001)が指摘する「女の子向けアニメ」の悪役として登場する女性像に通じるものがあるように見える。子ども向けアニメの中では悪役に女性が多く、そのイメージは「世界征服」や「権力欲」よりも「嫉妬ないしは物欲」といった私的感情を動機に主人公を攻撃する「母性を欠いた大人の女」であるという。特に女の子向けアニメの場合、悪の側の帝王のような立場にある女の悪役が、部下を遣わせてヒロインを襲わせ、最後にヒロインとみずから対峙して負けるという「女の敵は女」「少女の敵は熟女」という女同士の対立の構図がある(斎藤, 2001, pp. 55-60)。¹⁴

愛海は驚くほどの行動力で様々な策略を編み出しては歩を攻撃するようになるが、その行動原理にあるのは、自分が愛されるべき存在でありたいということだ。克己がヒロインに横取りされたという誤解をもとに、彼女がヒロインに向ける怒りは肥大していく。このヒロインに対する敵意はまた、「カツミくんのお嫁さんになるのが夢だった」(Vol. 1, p. 199)はずの彼女が克己以外の男と関係を持ち、彼を軽視するようになってもお維持され、エスカレートしていく。また愛海がアキラと肉体関係を持つにあたって、彼女は自身の性的魅力を用いて男をあやつる、性的な存在としてテキスト上に立ち現れるようになる。そんな愛海はいかにヒロインへの敵意が募ろうと、なかなか自分で手を下して攻撃することなく、他人を利用して彼女を苦しめていく。

こうした一見矛盾しているかのような愛海の行動やふるまいが、女の子向けコンテンツにおいて繰り返し語られる女の悪役像についての知識、またとりわけ「大人の女」のイメージと結びついていたと仮定すると、愛海の用いる「女ことば」が役割語としての機能を担っていたようにも見える。愛海の「女ことば」が、彼女の普段用いている「女の子ことば」からも、周囲の少女たちの言葉遣いからも異なるものとしてしるしづけられているとしよう。一般に「女ことば」は「大人の女らしさ」と結びついていると言われており(中村, 2007, p. 37)、また序に述べたように、「女ことば」を作中で継続的に用いるのは少女たちよりも年上の女性である。この点から考えるならば、愛海が継続的に「女ことば」を用いることが「大人の女」の言葉で話すことを意味し、さらに「大人の女」を悪役と位置づけるようなステレオタイプと関連することで、彼女の一面が担う狡猾な悪役としての役割をわかりやすいものにしていたとも言えるのではないか。

こうした女の悪役として愛海の立場を見直す上で、特に重要なのは、女の悪役がストーリーを刺激する存在だということだ。「自分の論理で積極果敢に動く」女の悪役キャラクターが、「単

調な女性の登場人物が多い」アニメの物語世界を「活気づかせる」影の主役でありながら、最終的には「負ける」ことが約束されていると齋藤(2001, p. 60)は述べる。少女コミュニティの中での複数の少女たちによるヒロインへの攻撃と、それに立ち向かうヒロインを描いていくだけでは、物語は単調になる。そんな中、愛海がアキラと関係を持つことで、少女コミュニティ内でのいじめの物語はより錯綜し、ミステリアスな展開を帯びるようになる。第2節の例に見る、愛海が「女ことば」を駆使しつつ、自分の策略を述べるようすは、読者の目にも触れることで、再びヒロインが脅かされる可能性を示唆し、ヒロインの近い未来についての不安を読者に抱かせる。そのため、彼女のふるまいは次話への読者の期待を誘い込むようになる。ここから見ると、愛海はアキラとの関係を境に「女ことば」を用いるようになったことで、悪役としての位置づけを得るだけでなく、物語のプロットや連載の構成において重要な「役割」を果たしていたともいえる。

複雑化する一方のストーリーの中で解決されずにきた愛海と歩の間の誤解は、連載開始から約6年後の2008年3月号、69話のクライマックスにおいてようやく解ける。多くの生徒たちに追い詰められた愛海は、学校から逃走して克己を頼ろうとする。しかしそこで、克己がかつて歩に対する暴行を行ったことだけでなく、彼が最初から愛海を愛してなどいなかったことが明らかになる。絶望に陥った愛海は、克己を刺し、自分も死のうとする。それを必死で止め、彼女に生きるよう訴えかけるヒロインの言葉を聞き、歩と自分が出会った頃の回想をめぐりながら、愛海は感極まって涙を流す(71話)。さらに、72話では愛海が自殺しようとしたと知り、かつての取巻きの少女たちが「友達」であった愛海に対して行った自分たちの行為を悔いる。このクライマックスに至って、一見この「ライフ」という物語は、長い間の誤解と葛藤の末にようやく二人の少女が理解しあい、少女間の絆が再び結ばれるまでを描いているように見える。

しかし、愛海の「女ことば」に先の女の悪役としての役割を見出すならば、物語はすでにもう一つの次元で女性間の対立を描き、そして女性を取りまくもう一つの力構造を含み込んでいたかのように見える。第2節の最後では、愛海が周囲の生徒たちに非難される立場になり、次第に「女ことば」を用いなくなるという状況について触れた。この場面は女の悪役が、ストーリーを活気づかせた後に必然的に迎える「負け」として解釈することもできる。愛海の継続的に用いる「女ことば」が、人を巧みに操ろうとする狡猾さや自己愛、逸脱したセクシュアリティといった要素とともに、威圧的な態度の邪悪な「大人の女」という役割をしるしづけるものだったとしよう。このクライマックスは、そのような愛海の中の「悪女」がさんざん踊らされた挙句に倒され、その後でようやく少女たちの世界に平和がもたらされるという物語の結末でもあるように見えるのだ。¹⁵

「ライフ」は少女マンガ連載として多くの読者の人気を得、物語が「リアル」であるという反響を呼んでいる。このような反響は、時に、このフィクションの世界が現実におけるいじめの問題や、少女間の葛藤を反映しているものだという言説を呼ぶことがある（高橋, 2007）。また、「ライフ」に関連させていじめ問題のルポルタージュを著した藤井（2007, p. 102）は、第2節で見えてきたような「いじめられている歩と、いじている愛海」の間の錯綜した関係に言及し、「いじめは事実関係の確認がとて難しい」問題だということを説明している。しかし、少女間のいじめを描いたこの物語が多くの読者の共感や支持を得るようになったのは、ひとえに作品が少女たちの「現実」を描いていたからだと言えるだろうか。連載の中で一時期「女ことば」を多用するようになるという愛海の言葉遣いの変化を通してむしろ見えてくるのは、その物語世界の受容がいかにフィクション上の言語や、ジェンダーをめぐる我々のファンタジーに依拠しているかということである。

むすび

本稿では二つの面から愛海が「女ことば」を用いる過程を検討してきた。微視的な面からは、愛海の「女ことば」の使い分けには、彼女が巧みに自己像を切り替えることでヒロインに対して優位に立つという「戦略」があることを指摘した。その戦略とは周囲の人物に対して「かわいい」、弱くて守られるべき、そして愛されるべきパーソナリティとして自己を提示し、その対照として歩の攻撃的なイメージを流布することで、自分が愛される一方で歩が非難されるという状況を作るというものである。巨視的な面では、「女ことば」を使用する愛海の描写には、女の子向けの物語における大人の女の悪役に通じる要素があることを指摘した。「女ことば」を用いる上で、愛海はその「悪女」のイメージをまとい、テキスト中でヒロインを脅かす威圧的な存在として位置づけられることで、物語にとって都合よい形で扱われ、やがて物語世界から排除されるに至ったかのように見える。この点で愛海を用いる「女ことば」は、物語の構成においても重要な「役割」を体現するものであったと言える。

本稿では物語世界の中で周辺化される要素との関連に注目し、愛海の「女ことば」を扱ってきた。しかし、このような視点から本稿をまとめる上で、いくつかの論点を捨象せざるを得なかったこと、またそのために見解の偏りが生じているということも認めなければならない。本稿の目的のひとつは、彼女の「女ことば」を通してある女性像が物語世界の中で構築され、排除されていく過程を辿ることであった。しかしながら主に第3節で見えてきたこの「女ことば」の意味は、第2節で見た愛海自身の使い分けの中での「女ことば」の意味と、完全に一致することはない。そのため愛海の言葉遣いの切り替えとジェンダー規範との関わりについて、テキストはまだ解釈の余地を残すのである。この点で特に心残りに思うのは、愛海による「女

ことば」の切り替えを、周囲に期待される「女の子らしさ」の攪乱として読み解く可能性について十分に触れられなかったことである。第3節では愛海が物語の展開を刺激する存在になるようすについて触れたが、これをもし愛海が読者から人気や注目を集め、アンチヒロインとして立ち現れてきた過程として捉えるならば、物語の中で愛海が「女ことば」を用いることによって担うようになった「役割」についての解釈ももっと開けてくるはずである。例えば第2節の一部では、彼女が権威をもつ父の前で庇護されるべき、弱くてかわいそうな少女を演じることで、自分の策略にいとたやすく彼を巻き込んでいるようすについて触れた。このような描写においては従順でか弱い少女という「女の子らしさ」に向けられる期待を、彼女が「女ことば」を用いながら出し抜き、裏切ろうとするようすが読者に爽快感をもたらしていたとも考えられる。もしそこに読者と愛海との絆を見出そうとするならば、男性の権力や男性に守られるような「女の子らしさ」の規範に屈するように見せかけて、その状況を手玉に取ろうという、ジェンダー秩序への挑発的な価値観がテキストを通してもたらされていたとも考えられるであろう。言語使用とジェンダー規範に関わるこのような抵抗的な読みの可能性についてはいつかまた、他の機会に改めて論じてみたい。¹⁶ 虚構の物語の中で用いられる「女ことば」とジェンダー規範との関連性は、読まれることに介在するこのようなさまざまな視点や力のせめぎ合いの中で生じたり、見出されたりするものではないだろうか。本稿では物語テキストにおける言語コミュニケーションの多層性を通して、物語構造における「女ことば」の機能について検討してきた。この多層的に媒介された、いわば多声性に満ちているフィクションの言語が、テキストを取り巻く社会的な力とかかわることとでいかに意味をなしていくかという面についても、今後は議論を開いていきたい。

Reference

- 金水敏. (2003). 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 東京: 岩波書店.
- 斎藤美奈子. (2001). 『紅一点論』. 東京: 筑摩書房.
- 佐竹久仁子. (2003). 「テレビアニメの流布する「女ことば」/「男ことば」規範」. 『ことば』, 24, 43-59.
- すえのぶけいこ. (2002-2008). 『ライフ』(Vols. 1-18). 東京: 講談社.
- 高橋すみれ. (2007). 「<邪魔(オッド)な娘(ガール)は消せ(アウト)!>——すえのぶけいこの三作品に描かれる、「少女間のいじめ」をめぐるって」. 『女性学年報』, 28, 41-65.
- 高橋すみれ. (in press). 「挑発する「女ことば」——少女マンガ「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用」. 『多元文化』, 9.
- 因京子. (2003). 「マンガに見るジェンダー表現の機能」. 『日本語とジェンダー』, 3, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no3/No3_2.htm#B00a
- 因京子. (2005). 「女性語のゆけえ——絆として鑑としての女性語の可能性」. 『言語文化叢書』, 15, 30-45.
- 因京子. (2006). 「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」. In 日本語ジェンダー学会 (Ed.) 『日本語とジェンダー』 (pp.53-72). 東京: ひつじ書房.
- 因京子. (2007). 「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い——女性ジェンダー標示形式を中心に」. 『日本語とジェンダー』, 7, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no7/02_chinami.html
- 中村桃子. (1996). 「言語規範としての「女ことば」」. 『自然・人間・社会』, 20, 33-60.
- 中村桃子. (2001). 『ことばとジェンダー』. 東京: 勁草書房.
- 中村桃子. (2007). 『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』. 東京: NHK 出版.
- Burr, Vivien. (1997). 『社会的構築主義への招待』(田中一彦, Trans.). 東京: 川島書店. = (Original work published 1995). *An Introduction to Social Constructionism*. New York: Routledge.
- Booth, Wayne C. (1991). 『フィクションの修辞学』(米本弘一, 服部典之 & 渡辺克昭, Trans.). 東京: 書肆風の薔薇. = (Original work published 1961). *Rhetoric of Fiction*. Chicago: Univ. Chicago Press.
- 藤井誠二. (2007). 『学校は死に場所じゃない——マンガ『ライフ』で読み解くいじめのリアル』. 東京: ブックマン社.
- 水本光美. (2006). 「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルタ」. In 日本語ジェンダー学会 (Ed.), 『日本語とジェンダー』 (pp. 73-94). 東京: ひつじ書房.
- 水本光美., 福盛壽賀子., & 高田恭子. (2008). 「ドラマに使われる女性文末詞——脚本家の意識調査より」. 『日本語とジェンダー』, 8, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no8/02_mizumoto.html
- 山口治彦. (2007). 「役割語の個別性と普遍性——日英の対照を通して——」. In 金水敏 (Ed.), 『役割語研究の地平』 (pp. 9-25). 東京: くろしお出版.
- 山路奈保子. (2006). 「小説における女性形終助詞「わ」の使用」. 『日本語とジェンダー』, 6, (no page numbers in the electronic version). Retrieved June 4, 2008, from <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/journal/no6/03yamaji.html>
- 「ライフ 第 69 回 (扉絵頁)」. (2008, February 13). 『別冊フレンド』, 2008 年 03 月号, 269.

Footnote

- ¹ テキストからの登場人物のせりふを引用する部分では、すえのぶの同一作品のみの取り扱いとなるため、便宜上(コミックス単行本の巻,頁)という表記を用いる。また、せりふの引用において、連続するせりふが幾つかのフキダシに跨っている場合、フキダシ間の区切りを「/」で示している。
- ² 水本(2006)は20代、30代、40代の女性たちの親しい者同士の会話データから、「わ」「だわ」「かしら」「わね」「わよ」「体言+ね」「体言+よ」「のよ」「のね」「の(非疑問系)」の10種の「従来女性特有とされた文末詞」の使用状況を分析している。その結果、30代以下の女性のサンプルでは「の」と「のね」以外はほぼ死語となっていることが明らかにされている。
- ³ フィクションにおけるキャラクターの言語使用をテキスト全体の世界観と関連させた先行研究には、翻訳マンガにおける女性キャラクターの言葉遣いを扱った因(2007)の分析がある。この先行研究では、複数のテキストにおける女性の言語使用と伝統的なステレオタイプの女性像との関連性を検討することに重点が置かれている。これに対し、ある物語世界が受容されるための修辞の一部として「女ことば」の機能を多層的に捉えようとする点で、本稿の着眼点は異なる。
- ⁴ 本稿で言語使用と人物像との関連について言及する際に用いる「パーソナリティ」は中村(2007, pp. 25-28)の用いている「アイデンティティ」とほぼ同義であり、言語使用やふるまいを通して構築されるような、ある人物が「どのような人物なのか」という統合的なイメージをさす。しかし、ある少女が二面性をもち、「女の子ことば」と「女ことば」を使い分けていく過程を分析する本稿で、この「アイデンティティ」という用語を使用することは議論の混乱を招く。そこで同様に社会構築主義の立場からバー(1997, p. 34)が「人間行動を説明するための、そして他者との社会的相互作用で自分の役割を予知しようとするための」概念として扱っている「パーソナリティ」という言葉を用いる。
- ⁵ マンガ表現は、言葉と絵によって成り立つものである。愛海のパーソナリティの切り替えや変化は絵によっても強調されているが、本稿は物語中の「女ことば」の使われ方を検討するものであるため、絵による描写への言及はこれらの言葉遣いの分析に関わる部分にとどめておく。
- ⁶ 『別冊フレンド』2008年3月号の「ライフ」69話の扉絵頁には、当時17巻まで発行されていたコミック単行本について「累計850万部突破」という情報が書き込まれている。
- ⁷ この点に関して、「皮肉・嫌味を込め」た文脈で用いられる「かしら」、および「主張度の強い場面で用いられる」「わ」や「わよ」といった女性文末詞がドラマで頻用される理由について、水本 et al.(2008)が「ドラマがドラマティックであるゆえの、主に日常的な対立場面の多さ」を指摘している点は興味深い。
- ⁸ この「レトリック」という言葉を本稿では、文学テキストの構成を論じる上でブース(1991, p.9)が定義するところの「書き手が、みずから意識しているか否かは別として、自分のフィクションの世界を読者に押し付けようとする時に利用することができる修辞的な手段」として用いている。
- ⁹ この「女の子ことば」という用語は本稿で愛海の言葉遣いを整理するために便宜上設定しているものであり、テキスト中の「少女」キャラクターや、実際の若い女性に用いられている

言葉遣いを総合的に指すものではない。少女キャラクターの一人として登場した物語初期から見られる愛海の言葉遣いの特徴をカテゴリー化するためのものである。

- ¹⁰ 「のよ」「体言+よ」に関しては、実際に愛海の友人たちが使う場面もある。12話で、路上で知らない男という愛海を見つけ、彼女たちがあわてて駆け寄る中で言われる「なにやっつてんのよ／だれよその男一」(Vol. 4, p. 20) がそれである。また、39話であれこれと策略をめぐる中で愛海がクラスメイトたちから得ている信頼が揺らぎつつある中、ヒロインの歩が彼女に「大変そうね／嘘で塗り固めるのも」(Vol. 10, p. 164) と告げる場面もある。しかし、このような発話は愛海の「女ことば」使用のようにパターン化されているものではないと判断する。
- ¹¹ 先に挙げた、愛海が「わよね」を使う最初の場面の後では、おそらく一度他の女と関係をもった克己を想って、突然激昂した愛海がホテルの部屋の中で「思い知れ!! / …マナが一番かわいいんだ／マナが一番愛されるはずなんだ!! / どんな手を使ってでも……!!」(Vol. 7, pp. 75-7) と暴れるようすが描かれる。愛海がこのような断定の調子の強い「男ことば」を使うようすは、その後も特に彼女の感情が乱されているときに見られる。
- ¹² このような認識を促す「ライフ」のテキスト構造については、高橋(2007)で一部触れている。
- ¹³ 講談社発行『別冊フレンド』2002年5月号-2008年7月号の各連載記事を確認の上、これらのあらすじ部分について記述している。61話以降では、51話以降の文にある「友人をも恐怖で支配」の前に「かつては」が入る。
- ¹⁴ 一方、男の子向けアニメでは女性の悪役はめったに支配者の立場に立たず、「巨悪は男／小悪は女」「男は大敵／女は小敵」という図式があるという(斎藤, 2001, p. 57)。このような男女別に与えられる物語は大人世界の縮図をなすものであると斎藤(2001)は指摘し、これらの物語のジェンダー・イデオロギーを明らかにしている。
- ¹⁵ 本稿では「ライフ」第1話から第73話(『別冊フレンド』2008年7月号掲載)までの物語を分析対象としている。そのため、以降の物語展開における愛海の言葉遣いの変化を考慮することができていない。この後74話から77話の展開で、愛海は病院に運ばれた後に脱走し、歩のもとへ向かう。この展開での愛海のせりふには、場に応じて言葉遣いを極端に使い分けるといふ傾向は特に見られない。2008年12月号に掲載されている第77話「決断」には、かつていじめを主導してきた自分を警察に告発するよう歩に告げる「生かしたんなら最後まで責任取りなさいよ／…このままじゃマナはからっぽのまんまなんだ／うんざりなのよ／もう／パパに全部勝手に決められんのは」(pp. 50-1)という愛海のせりふがある。このように、その後の愛海のせりふには時に「～だ」という強い言い切りの表現や、一部の「女ことば」などが混用されている。本稿脱稿後に見られたこのような愛海の言葉遣いは、愛海が「女の子ことば」を使うことや、言葉遣いを物語中で頻繁に切り替えていたことの意味についてもさらなる検討を促す。なお、その後「ライフ」は『別冊フレンド』2009年3月号掲載の80話で最終回を迎えている。
- ¹⁶ 本稿で十分に扱いきれなかったこの点については、本稿での議論を一部受ける形で「挑発する「女ことば」——少女マンガ「ライフ」にみる少女の二面性と言語使用」(高橋, in press)にて論じている。同稿では読者の取りうる複数の視点、および少女コミュニティをめぐるセクシュアリティ規範と「女ことば」の規範性との関わりに注目し、愛海の「女ことば」使用が担っ

ていた意味を捉えようと試みている。

**The Role of the Villainess:
Women's Language in the Japanese Girl's Comic *Life***
Sumire TAKAHASHI

“Women’s language” in fiction has been discussed in terms of its role in constructing or representing gender norms in society and culture. Research in recent years has included a re-examination of this relationship between gender norms and women’s language in fiction. However, there has been little focus on the relationship between the fact that certain characters speak in “women’s language” and the context surrounding their speech in the narrative structure. This paper examines the meaning and function of one female character’s use of women’s language in the narrative structure of a Japanese girl’s comic called *Raifu* (*Life*). From a certain point in the series, the character starts to make extensive use of female-specific sentence endings that are not used in modern-day speech. If we consider the intention behind her speech in context, the use of women’s language can be linked to her artful strategy of attacking the heroine. On the other hand, given her marginalized position in the story, her use of women’s language identifies an important role that she has come to play in the narrative structure. With regard to the role of women’s language here, it could be argued that this is a story that not only depicts solidarity among girls, but also female conflict.

Keywords: women’s language, role language, Japanese girl’s comics, narrative structure, rhetoric